

平成 28 年度 国立大雪青少年交流の家教育事業 「登山指導者研修会」事業報告書

1 事業実施の背景

国立大雪青少年交流の家は、看板事業として十勝連峰のふもとに位置する立地条件を十分に生かした「登山指導者研修会」を企画・実施してきた。これは、青少年に対して、安全な登山を実施するための技術の向上を図ることをねらいとしており、今年で7年目の実施となる。

登山ブームと言われる昨今、登山人口は増える傾向にあり、誰もが登山を身近に感じられるようになってきた。また、冬山登山（バックカントリーを含む）を楽しむ人も増えると同時に山岳事故も増えている。登山は、自分の体力に応じて体を動かすことができ、充実感、達成感を味わえるという反面、大自然の中での行動は、常に危険と隣り合わせであり、少しの無理やちょっとした油断が遭難という事故を引き起こすことにつながる。登山が身近に感じられるようになった今こそ、登山前の準備（体力、知識、技術、装備）、計画が必要となり、その学びの場としても安全な登山の実施につながることから、この研修会の持つ意味は大きい。また、ここ数年、国内では火山活動が徐々に高まってきており、火山噴火による事故も起きている。大雪青少年交流の家では前年度より、十勝岳が活火山であることを踏まえて、活火山の理解と安全対策について学ぶ内容も盛り込んでいる。このことから登山についての学びの場として本事業が果たす役割は非常に大きく、意味があると言える。

2 事業趣旨

- (1) 学校をはじめとする集団登山を安全に実施するために必要な知識と技術を身に付ける。
- (2) 登山をとおして、自然の恩恵に気づかせるための指導法について理解する。
- (3) 活火山に関する理解を深め、安全対策について学ぶ。

3 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大雪青少年交流の家

4 協力 北海道山岳連盟 美瑛山岳会 旭川地方気象台

5 後援 北海道教育委員会、北海道小学校長会、北海道中学校長会、北海道高等学校長協会、上川管内教育委員会
連合会 美瑛町 美瑛町教育委員会

6 事業概要

- ・期日 平成 28 年 6 月 25 日（土）～26 日（日）（1泊2日）
- ・会場 国立大雪青少年交流の家及びその周辺 富良野岳
- ・対象 登山を含む野外活動において指導及び指導補助に関わる者（教職員 社会教育関係者 青少年教育施設職員
子ども会育成者 またはそれらを目指す者で 18 歳以上）
- ・定員 20 名（先着順）
- ・講師 旭川地方気象台職員（2名）
日本体育協会公認スポーツ指導員 山岳上級指導員 山名 賢一 氏
美瑛山岳会 佐藤 衡一 氏
国立大雪青少年交流の家職員

7 目的の達成指標（アウトプット）

- (1) 参加者数における教職員、社会教育関係者数
- (2) 参加者の満足度

8 広報

参加者の主対象者としている、各教育関係機関及び青少年教育施設、社会教育関係者においては参加における予算確保のため、年度前の10月から、北海道教育委員会を通じて早めの情報提供・事業の広報を行うことで参加者の確保に努めた。結果として、本来のターゲット層及び参加者数を確保することができた。

8 参加者人員・類型

参加者 26名（定員比 130%）
 内訳：社会教育関係者 13名、教職員 10名 一般3名）

9 事業日程・内容

(1) 日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
25 土							13:00~13:30 受付		開会式 オレンヂョ	① 説明・視察 「活火山の理解 と安全対策」		夕食	② 講義・演習 「安全な 集団登山」		入浴		就寝	
26 日	起床	準備	③ 実習 「集団登山の実際」 ※少雨決行						成果と課題	閉会式	16:00 解散							

(2) 概要・運営のポイント

全国各地で活火山が活発化している中、活火山である十勝岳を活用し、活火山に対する防災意識を高める研修プログラムを設定した。

(3) 各プログラム内容

① 説明・視察「活火山の理解と安全対策」(120分)

【講師：旭川地方気象台 火山防災官 小山 寛 氏 伊藤 大輔 氏】

開会式の後、十勝岳望岳台までバスで移動し、十勝岳が現在に至るまでの説明を受け、火山の成り立ちを学んだ。また、現在活火山の観測がいかに行われているのかを、実際に望岳台に設置されているカメラや地震計を見ながらから説明を受けた。そして、このような情報収集のおかげで人々の生活は火山から守られているということを知り、指導者として活火山に対する理解や情報収集の仕方について学んだ。さらに、火山については、よりよい防災システム構築のために、専門家のみならず、発見者からも情報提供を行うといった、情報の双方向性が必要であることを理解した。



② 講義・演習「安全な集団登山」(90分)

【講師：日本体育協会公認スポーツ指導員 山岳上級指導員 山名 賢一 氏】

指導者としての責任や義務についてトムラウシ山岳事故の事例をもとに学んだ。また、指導者が持参すべき登山用具について、実際に講師が持参しているものを見ながら解説を受け、登山の知識や技術についても学んだ。



③ 実習「集団登山の実際」(7時間)

【講師：日本体育協会公認スポーツ指導員 山岳上級指導員 山名 賢一 氏】

富良野岳に登り、集団登山について実践をとおして学んだ。当日は雨が降り、登山としては不向きな天候状況ではあったが、悪天候の中での登山を実際に体験することで、登山中止の判断基準、山の天気の実際、雨、風による体力の奪われ方、天気情報の収集の仕方、下山対応の実際、悪天候に備えての準備等、様々な知識と技術を学んだ。



9 参加者アンケートから

(1) 総合的満足度

- ・満足 20 (76.9%)
- ・やや満足 6 (23.1%)

(参加者の声)

- 集団登山について多くのことを知れたし、体験できました。
- 今まで素人としてしか登山していなかったため、今回登山準備や技術など大変勉強になった。
- 防災についての観点にもう少し焦点化するとよい。

(2) プログラム

- ・満足 18 (69.2%)
- ・やや満足 7 (26.9%)
- ・やや不満 1 (3.8%)

(参加者の声)

- 良い経験を積めました。
- 知りたかった情報、豆知識など、非常に有益なことを教えていただけてよかった。
- 山名先生の経験に基づいたお話をもっと聞きたかった。

(3) 事業運営

- ・満足 20 (76.9%)
- ・やや満足 6 (23.1%)

(4) その他参加者の声

- 施設運営、事業運営が大変参考になりました。遠方からの参加で、なかなか事業には参加できませんが、機会を見て、ぜひまた参加させていただきたいと思います。
- 天候のことも含め、なかなかない体験ができたと思っております。
- 今回のような山に登って（雨の降る状況下で）また改めて考えるきっかけになりました。
- 警戒レベル1を甘く見ていました。气象台の方に電話で情報をうかがえることが分かってよかったです。
- 急なことにも対応できるためには、いつでも「もしものこと」を考えておく必要があるとわかりました。
- 思った以上に火山が身近にあると思いました。子供たちにも身近なものとして感じて、身を守る方法を知ってほしいと感じました。
- 服が濡れると体が冷える、を実感しました。指導者として余分に持っていくことも必要だと思いました。
- 子供たちを安全に登山させるためには、いろいろ考えなくてはいけないことが理解できた。
- 町民登山会を企画・運営する立場として、もっと考慮に入れておかなければならないことがあったことに気づかされました。
- 実際に歩いてみて大人の歩幅と子供の歩幅の違いなどを実感することができ、子供目線で見ることも大切だと感じました。
- 雪が解けてからやってほしいです。
- 登山にあたって注意する点（ストックの使用や花等について）知りたかったです。

10 事業の成果

座学の講義に関して「もっと話を聞きたかった」という意見が多く寄せられており、知識習得のための意識の高さを感じさせられた。

技術、知識のみならず、リーダーとしての判断についても触れており、リーダー養成の場としても参加者の意識を持たせることができたと言える。また、火山について取り上げたことで参加者の火山に対する意識が深まり、登山にとって必要な知識であると捉えることができていた。また、火山の学びの中で一方的な情報の収集ではなく、自分の持っている情報も安全を維持する上で必要であり、安全は相互のつながり中で生み出されるということが、気象庁職員との間で確認できたことは双方にとって収穫だったと言える。

参加者については、社会教育関係者と学校教職員で占められており、前年度からの事業広報を行うことで、参加者の確保ができた。また、登山研修を事業に入れている市町村教育委員会に直接広報活動を行うことで参加人数を確保することができた。指導者を目指す参加者の意識も高く、アンケートにも要望等が多く寄せられていた。

11 事業の課題

今後の課題として、日程の見直しについてあげられる。「活火山」についてのプログラムは防災と火山のメカニズムで1つのセットとなり、切り離すことが難しい。「登山の知識」についてのプログラムでは、「登山に必要な知識」は幅広いため、「リーダーとしての知識」、「天候・装備等についての知識」と分けて時間を配分することが望まれる。また、参加者の思いに応えるために質疑応答の時間等を多く確保することも重要と考える。しかし、今年度の1時間半では参加者からも講師からも時間が足りなかったという声が寄せられた。参加者の火山や防災に関する要望は大きく、今のままでは時間を確保することは難しい。これを改善するためには日程を変更する必要がある。

開催時間を早めることで、「活火山」に関する理解や安全対策を2つのコマ、「登山の知識」においては、リーダーとしての知識と天候・装備の知識の2つのコマで扱い、研修の時間を確保し、学びを深めていくことで来年度はすすめていく。

日程の見直しと同じく、期日の見直しもあげられる。今後も富良野岳をコースとして考えるのなら、事前踏査の時期には雪渓が多く残っており、危険度が増してしまう。また、雪渓は登山研修当日も多く残っており、天候によっては気温もかなり低くなってしまう。さらに対象としている学校教職員（特に中学校教員）においては、毎年中体連と重なっており参加したくてもできないという声もいただいている。時期を遅らせることで、歩きやすさを増すと講師の方からも話をいただいております、1週間遅らせての開催とする。

但し、時期の変更が難しい場合は、雪渓が多くは残らない十勝岳登山を候補とする。

事前の準備としては、参加者はそれぞれに学びたいものを持っており、その内容がプログラムに含まれていないと不満につながってしまうため、プログラムの内容を具体的に参加者に伝える記述が必要である。